

漢魏洛陽城・ 北魏宮城 2 号門の発掘調査

はじめに

2008年3月、奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所の間で、漢魏洛陽城の共同発掘調査に関する協定が調印された。それに基づいて、2008年度は春期（4～6月）・秋期（11月～1月）の2回にわたり、漢魏洛陽城の北魏宮城2号門遺構の発掘調査が行われた。ここでは、その概要を報告する。

1 漢魏洛陽城の位置と環境

洛陽は河南省北西部に位置する。西部高原地帯と東部平原地帯の境界にあたり、陝西省西安の関中盆地へ通じる交通の要衝でもある。漢魏洛陽城は洛河と伊河が合流する地点の西20kmに所在し、南に洛河、北に邙山を望む。なお、隋唐洛陽城は、漢魏洛陽城の西15km、現在の洛陽市とほぼ重なって存在している。

2 漢魏洛陽城の歴史と都城構造の変遷

洛陽は西周期に東方経営の拠点として洛邑が築かれて以来の古都とされ、秦に滅ぼされるまで東周の都城であった。その後、後漢光武帝が洛陽を都に定めると、西周・東周・秦の城壁を基礎として、北魏時代まで続く

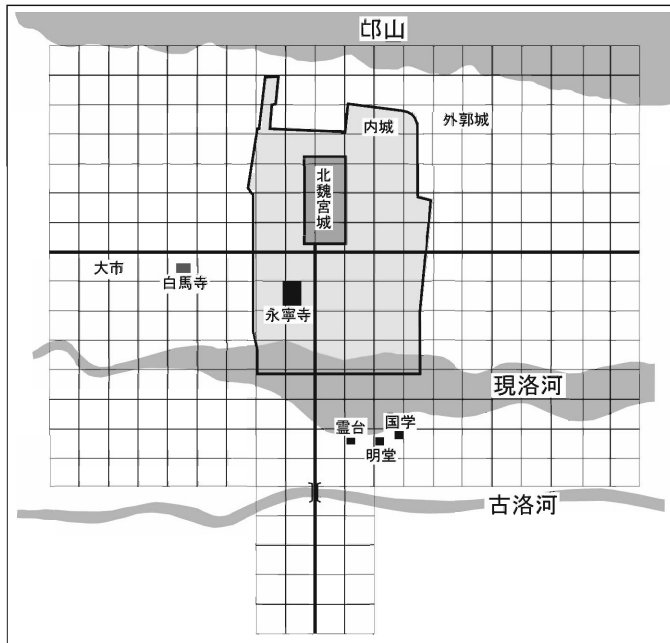


図25 北魏時代の漢魏洛陽城と条坊

内城構造が形成された。現在は南城壁が洛河の北移によって失われているものの、東壁・北壁・西壁は部分的に版築を残しており、現存長東壁3895m、北壁2820m、西壁3510mでいびつな長方形を呈する（図25）。

後漢末には略奪放火で一時荒廃するものの、魏の文帝によって再建整備され、再び都となる。魏晋期には、宮城北西隅に金墉城が置かれるとともに、後漢北宮の地に太極殿が造営された。

西晋が滅ぶと、華北は五胡十六国時代となるが、鮮卑族拓跋氏が興した北魏は、3代太武帝が華北を統一すると、6代孝文帝が洛陽を都とした。北魏時代には、魏晋期に造営された長方形の宮城が整備されるとともに、内城の外側に東西20里・南北15里、さらに南側に東西4里・南北5里の突出部を持つ碁盤目状の外郭城(条坊)が整備された(図25)。これによって条坊を完備する初めての本格的な都城構造が形成され、後の隋唐都城に引き継がれることになる。

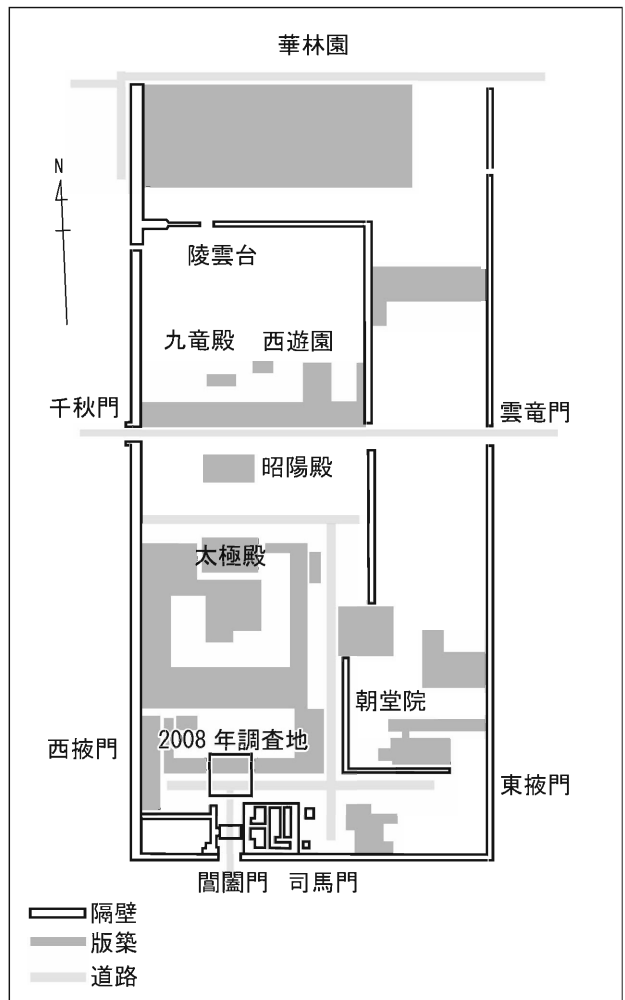


図26 北魏宮城のボーリング探査成果

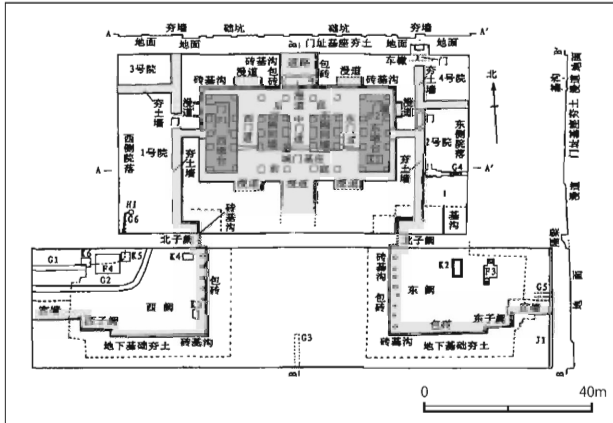


図27 閶闔門の発掘調査成果

3 北魏の宮城構造と閶闔門の発掘成果

北魏時代の宮城は既にボーリング探査によって、およその構造が判明している（図26）。南北1398m、東西660mの長方形プラン内は、東西道路によって南北に2分される。南の西院北側には、金鑾殿と呼ばれる東西100m、南北60m、版築層2mの巨大な基壇が遺存しており、北魏時代の太極殿と考えられている。太極殿中軸の南延長上には宮城の正門：閶闔門、その南には銅駝街が宮城外郭まで貫通している。

閶闔門は、1999年・2000年に社会科学院考古研究所により発掘調査されている（図27）。閶闔門の発掘では、東西44.5m、南北24.4mの門の版築基壇と前庭左右に大型の門闕が検出された。なお、基壇外装は磚積みで構築され、漆喰で塗装されていた。また、基壇上には4つの建築物基壇が確認され、大型殿堂式建造物の存在が想定されている。このように北魏期の宮城正門が全面発掘されている意義は大きいですが、共同調査ではその成果を基礎とし、さらに閶闔門から太極殿までの北魏宮城中枢部の解明を目的とし、この地域の集中的な発掘を計画した。

4 2008年度の発掘調査成果

北魏宮城中枢部の解明を目指す共同調査の目的を踏まえ、2008年は閶闔門の北側部分の発掘調査を行った。この部分には、既にボーリング調査によって閶闔門とほぼ同規模の門遺構（2号門）が確認されていたため、春期に試掘で範囲確認を行った上で、秋期に2号門遺構の全掘調査を実施した。以下、概要を説明する。

春期は、門遺構の範囲確認を目的として西側にトレンチを設けるとともに、南北に存在する道路遺構の確認調査を行った。その結果、2号門の基壇版築の範囲を確定



図28 2号門基壇全景（東南隅から）



図29 2号門基壇外装・北側の磚積み（東から）

し、道路遺構についてもその位置を確認した。

秋期は、その成果を踏まえて、2号門遺構の範囲を全面調査するため2400㎡の調査区を設定した。その結果、東西約44.5m、南北23.0mの大型の門基壇を検出した（図28）。基壇外装は磚積みでその上から漆喰を施しているが、基壇版築の南北には北魏時代の瓦が全面的に散布している状況が明らかになった（図29）。また、基壇の南北には、西門道・中門道・東門道の3つの門道に対応するスロープ（漫道）の突出を検出し、門の東西には版築壁が接続する状況を確認した。さらに門基壇上には3つの門道を挟み込む4つの建築物基壇とそれに伴う礎石の据付掘方を検出した。これらの成果から、2号門遺構は、閶闔門とほぼ同一の構造をもつ大型殿堂式建造物である事実が判明した。

おわりに

2008度は、本格的な日中共同調査の一年目となったが、来年以降は2号門のさらに北側部分の発掘調査を進める予定である。漢魏洛陽城中枢部の様相解明が期待される。

（城倉正祥）